＊開所式の報告は HP のニュースレター 2023 年 10 月号をご覧ください。
https://tabijinosato.org/wp-content/uploads/2023/11/7adeb98711a1fe8a188beac8984068c7.pdf

旅路の里から

HPのキャラクター
たび次郎

ご協力のお願い

寄付金・物資にかかわらず年間を通した炊き出し、よまわりを始め、
釜ヶ崎の活動支援に役立てられます。

寄付金あてさき

郵便振替　00920-3-56487
「宗教法人　カトリックイエズス会　旅路の里」

支援品

男性衣料（下着は新品・未使用品のみ。他は使用したものでも可ですが、いたみのないもの、洗濯済みなもの）春夏ものでも結構です。

食料品（賞味期限内のもの）・
お茶・コーヒー（粉コーヒーも歓迎です）他飲料

ご参加ください

● 毎月第 3 月曜日 19 時より旅路の里にて「いやしのミサ」実施しています。どなたでも参加できます。遠方の方は意向メール・お手紙などをおよせください。ともに祈りたいと思います。

● 新スタッフ紹介

建て替え時期から釜ヶ崎におりました援助修道会西成修道院の大田伊杜子が退職し、
江見玲子（八尾教会信徒）が入局いたしました。
よろしくお願いいたします。

江見玲子

釜ヶ崎はいろいろな学びがいっぱいです。お仕事させていただけることを喜んでいます

旅路の里ニュースレター 2024 年 4 月号　発行：旅路の里
〒557-0004　大阪市西成区萩之茶屋 2-8-9
電話：06-6641-7183　Mail：tabijinosato1@gmail.com　HP：https://tabijinosato.org

旅路の里
大阪 釜ヶ崎

旅路の里ニュースレター

2024・4　特集　釜ヶ崎・旅路の里 越冬の活動

神の国は近づいた（マルコ 1,15）

所長　英（ハナフサ）　隆一朗（リュウイチロウ）（イエズス会司祭）

皆さま

いかがお過ごしでしょうか。旅路の里の活動に協力してくださり、ありがとうございます。

私が釜ヶ崎にかかわったのは今まで3回あります。1回目は約40年前、大学生の時です。初代所長の薄田昇神父が釜ヶ崎に行き、古い簡宿（簡易宿泊所、通称ドヤ）を借りて住み始めた頃です。その建物が旅路の里になりました。当時、私は彼の手伝いで東京から通っていました。その頃は日雇い労働者の町として、活気が溢れていました。普通の日本社会とは全く違う雰囲気で、何か第三世界を彷彿させられるようで、わくわくするような感動を覚えました。2回目は約20年前、旅路の里の専任の所長として赴任した時です。2年半ほど働きました。その時は、バブルの崩壊後、野宿者の数が非常に多く、絶望の中から町を再生しようという意欲が感じられる時でした。労働者の町から福祉の町に移行していくことになり、仕事づくり・居場所づくり・町づくりを多くの人が意識していました。そして今回は3度目の正直で、六甲教会の主任司祭をしながら、責任者をしています。現在の釜ヶ崎は老人が増えただけでなく、外国人がとても増えてきて、新しい流れを感じています。

40年の流れで見ると、釜ヶ崎の変遷がそのまま日本社会の変遷の映し鏡のように見えます。高度経済成長期から成熟した社会になり、外国人と共住する時代が到来しています。日本社会にしても、釜ヶ崎にしても、これから何を目ざして、どこに向かおうとしているのか、はっきり見えない面もあります。

社会がどう変わろうと、釜ヶ崎には変わらないものがあります。それは、いつの時代も釜ヶ崎に生きづらさをかかえている人びとが流入し、その人たちと共に働き、共に暮らす町だということです。その中で貧しい人を食い物にする人びとがいると同時に、イエスのまなざしに合わせて、神の国を共に生きようとする動きが見えてきます。

旅路の里の役割は、最も弱い人に寄り添いながら、私たちの生き方と社会のあり方を見つめ直すことだと思っています。イエスの宣べ伝えた福音の核心から、小さな人びとの姿と声を受けとめ、神の国のチャレンジを多くの人と分かち合っていくことです。

幸い、昨年の9月に再オープンしてから、多くの方々が訪問してくださり、恵みを分かち合っています。これからもイエスのまなざしに心を合わせ、神の国の到来に向かっていくことができますように。

2023年12月―2024年3月

釜ヶ崎・旅路の里 越冬の活動

福田紀子（旅路の里コーディネーター）

今までに訪れた人が気づかずに通り過ぎてしまうほど様変わりした4階建ての建物は、1-2階を「旅路の里」、3 - 4階を「こどもの里女子自立援助ホームパレット」となり、2023年秋から本格的な活動が始まりました。「旅路の里」は「at釜ヶ崎で、about釜ヶ崎について、with釜ヶ崎と共に、through釜ヶ崎を通して」社会を学び、自分に気づき、これからを築こうとする施設です。建て替えリニューアル後の初めての越冬とそれに備える季節を迎えました。

「支援物資」は人と活動をつなぐ

クリスマス前後から、キリスト教学校や教会・個人からの支援物資の受け取りが始まりました。新しく、スペースにも余裕のあった旅路の里の棚やフロアは瞬く間にいっぱいになりました。その点検、分類や適切な配分を調整することが必要です。50年間の活動と関係を持つキリスト教協友会のネットワーク、第42回となった実行委員会で行われる「越冬闘争」を始め、地域の高齢者に文字通り寄り添う訪問看護ステーション、カフェなどの居場所づくりグループなど新しい活動の場も含めて、ここに住む人々を大切にし、地域をよりよくするための団体とより具体的につながっていく機会となりました。

言うまでもなくこのような活動は単に「ものを送る」行為だけではありません。どんな状況の、誰に、なぜ支援するのか。学校ではいろいろと工夫されているのだと思いますが、その中のいくつかの学校では現場からの直接の声としてお話もさせていただきました。

「越冬支援」高校生体験学習の場として

年末年始の「越冬闘争」はリスト教協友会他多くの団体が実行委員会として参加しており、その後も3月までキリスト教協友会は夜回りなどの「越冬活動」を続けています。そこに訪問される高校生や市民の方々にとっては「豊かさと貧困」「高齢社会」「社会の変化と脆弱な人々への影響」「支援の多様で重層的な様相」について現場で考える機会です。その「現場」とはなんでしょう。そこに生きる人、暮らしや社会にむけた活動とそれを支える人、そして生きる場としての「まち」を通した学びです。

「旅路の里」では昨年12月下旬から春休みの終わる4月第1週までで、高校生グループ11校20回100名以上の生徒と教員の訪問がありました。それ以外にも中学生を含めてボランティアに参加する親子での滞在や、海外研修生の受け入れも行いました。

高校生の訪問では「まち歩き」「炊き出し」「（野宿者に声をかける）夜まわり」などが釜ヶ崎体験としてよく行われますこれらは、単に定型化したボランティア体験ではありません。もちろん体を動かしていろいろな方と活動すること自体にも意味があるのですが、貧しい人を餓死や凍死から救うためのものというイメージだけでは（そのような側面もいまだにあるのですが）もっと生きた社会のつらなりの中にあります。

50代以上の世代にはあたりまえの「高度成長」「バブル景気」「バブル崩壊」「リーマンショック」などの社会の変化と、その中で脆弱性の高い、弱い立場になりがちな人々について、高校生にどのように伝えられるでしょうか。その時代を生き、働いてきた人々が今、年を重ねて釜ヶ崎で暮らしているのはなぜなのでしょうか。

釜ヶ崎で何を学ぶのか

高校生たちと参加したある夜回り前の学習で、自分たちの生活をささえるものである、電気・ガス・上下水道・道路・鉄道など「人間らしい生活」のために必要なものをみんなで活発に上げた後、電気が具体的にどこでつくられているかを問われて沈黙が起こりました。別のグループでは夜回りの感想を聞かれて「何といっていいかわからない。ことばにならない。でも心に深く刺さっていて、忘れたくない」という声を聴きました。「大阪で育ったけれど、西成のここ（釜ヶ崎）に来ることは考えられなかった」「この研修は参加する気になれなかったが、先に参加した友人から人や世の中を“見る目が変わるよ”と言われてきました」という声もあります。彼・彼女らのことばも、ことばにならない沈黙も、わたしたちにとっては一つ一つが共感と学びの瞬間です。

もう一つ言えば、参加を希望しながら家族の同意が得られずに参加できなかった生徒もいます。「参加したこと」はもちろん、「参加できなかったこと」も大切な経験として「なぜ」を問い、深い学びの機会にできるのではないかと思います。

多様な出会いと学びを目指して

「旅路の里」は1980年当初、創設者の故薄田神父がイエズス会の「決然たる態度も持って、不正と抑圧されている世界に関与する」ことを志して設立されました。そしてその関与のありかたに、釜ヶ崎のキリスト教協友会ほかのここでの支援者の共通点があります。それは「人を大切にする」ことです。夜まわりを行う様々な支援者や団体も、訪問看護や生活やしごとの相談に応じる支援者も、活動の領域や種類にかかわらず、徹底的に「その人の意向を尊重する」ことを大切にしています。神の愛をわたしたちが実践する「互いに愛し合う」とは「お互いに、人を大切にする」ことだと、長く釜ヶ崎で働く本田哲郎神父は強調します。

釜ヶ崎のボランティア体験、日常とは異なるまちのようす、そこに住みながら活動する人々のお話しは、特に18歳成人の今、高校生にとって、人とまちに出会いながら考える貴重な機会であり、社会に責任をもってか関わるためにも大変重要なことだと考えています。ただ、高校生だけが学ぶ場ではありません。年齢、ジェンダー、言語など多様な方々の出会いと学びの場として、活動を築いていければと願っています。

夜回りの前後に欠かせないレクチャーと振り返り＠ふるさとの家

炊き出し野菜丼の隣で支援いただいたコーヒーとクッキーを提供。こちらも人気で声もかけられます。

インドネシアの村の初の助産師として日本の状況を学びに来た研修生も参加しました。

朝7時半からの野菜切が配食にも勝る一番忙しいときです。90代のシスターと高校生がいっしょに働くのも釜ヶ崎ならではの風景です。

野宿者ネットの生田武志さん他、釜ヶ崎で働き・活動する人々のお話をききます。